

Tauya 語の属格名詞と語順の普遍性

時 崎 久 夫
桑 名 保 智

1. はじめに

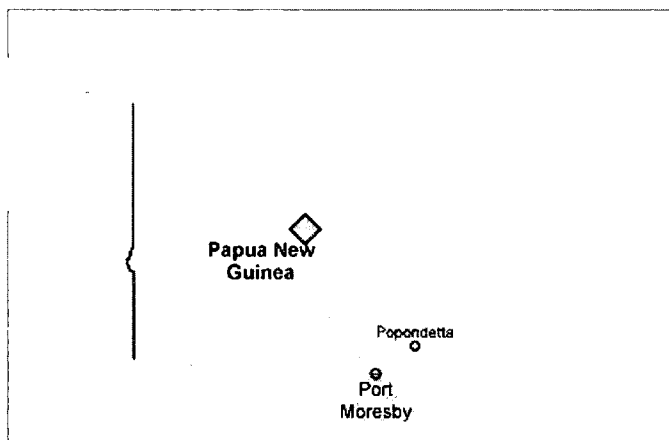
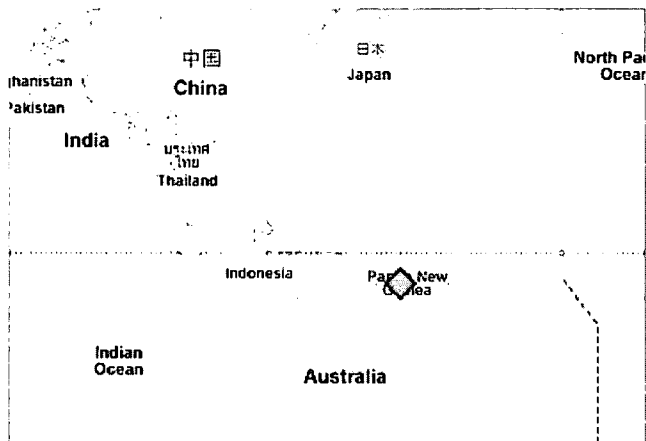
パプアニューギニア、Madang 地方の Tauya 語では、属格の代名詞は修飾する名詞に後続するが、属格の名詞句は修飾する名詞に先行する (NP-N-Prn)。これは、Dryer (2005) によれば、属格の代名詞と名詞句が修飾する名詞の同じ側に生じる (Prn/NP-N, N-Prn/NP) 多くの言語と異なり、また、属格の代名詞が修飾名詞に先行するするが属格の名詞句は修飾する名詞に後続する (Prn-N-NP) フランス語などと逆になる、例外的語順である。

しかし、本発表では、Tauya 語の属格の接尾辞に、代名詞に付く *pi* と名詞句に付く *na* の 2 種類があることに着目し、実際には属格が代名詞と名詞句の両方の場合とも、全体の名詞句は補部 (complement) が主要部に先行する語順であり、「名詞句-主要部-代名詞 (NP-Head-Prn) という語順の言語は存在しない」という一般化の例外でないことを述べる*。

本論に入る前に、Tauya 語について簡単に見ておく。Tauya 語は、Haspelmath et al. (2005, 2008) *The world atlas of language structures* (以下 WALIS と略) によれば、Trans-New Guinea, Madang 地方の 1 言語であり、

* 本稿は、日本語学会第 137 回大会 (金沢大学、2008 年 11 月 29, 30 日) における口頭発表内容に加筆し、修正を加えたものである。有意義なご意見を下さった方々、特に風間伸次郎、梶茂樹、河内一博、野瀬昌彦、湯川恭敏の各氏にお礼申し上げたい。また、本研究は平成 20 年度科学研究費 (基盤研究 C, 18520388) による成果の一部である。なお、発表で使用したスライド・資料は <http://toki.nagomix.net/j/files/> を参照されたい。

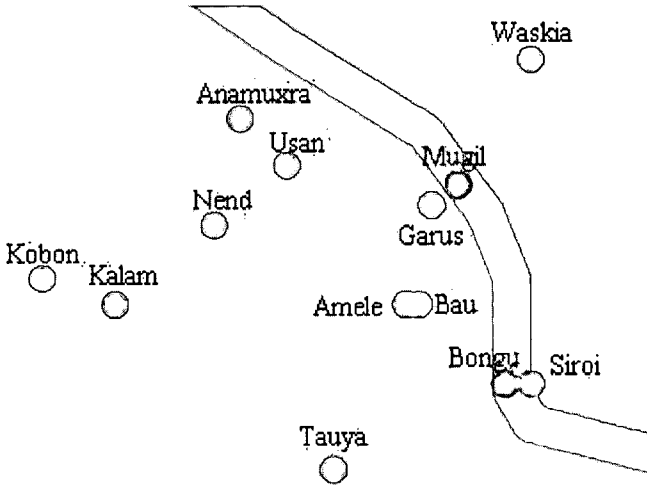
Wikipedia には Rai Coast の 1 言語で話者は約 350 人と記載されている¹。



¹ http://en.wikipedia.org/wiki/Tauya_language, 2008 年 12 月 17 日改訂の記載による。本文中の地図は、WALS の Online 版と CD-ROM 版を基に作成した。なお、本研究は類型論的に言語の普遍性を探ろうとするものであり、Tauya 語の記述を目的とするものではない。また現地調査も地理的条件と治安情勢のため、行っていない。文献などに基づく研究であることをお断りしておきたい。

Tauya 語の属格名詞と語順の普遍性 (時崎久夫・桑名保智)

Madang 語族は、WALS によれば、Amele, Anamuxra, Bau, Bongu, Garus, Kalam, Kobon, Mugil, Nend, Siroi, Tauya, Usan, Waskia の 13 言語からなる。



2. 属格名詞句と被修飾名詞の語順および普遍性

2.1 名詞句-被修飾名詞-代名詞という語順の特殊性

Tauya 語では、属格の代名詞は(1a)のように修飾する名詞に後続するが、属格の名詞句は(1b)のように修飾する名詞に先行する(NP-N-Prn) (以下 Tauya 語の用例は MacDonald (1990) による)。

- (1) a. *wate ne - pi* (N-Prn)
house 3s Gen
'his/her house'

b. *e fanu- na wate* (NP-N)

Dem man Gen house

'that man's house'

これは、Dryer (2005) によれば、属格の代名詞と名詞句が修飾する名詞の同じ側に生じる中国語 (Prn/NP-N) (2) やスワヒリ語 (N-Prn/NP) (3) などの多くの言語と異なり、また、属格の代名詞が修飾する名詞に先行するが属格の名詞句は修飾する名詞に後続する (Prn-N-NP) フランス語 (4) などの言語と逆になる、特殊な語順である。

(2) Mandarin (Li and Thompson 1981: 113)

a. *wǒ de chènshān* (Prn-N)

1Sg Link shirt

'my shirt'

b. *rùzi de ěrduō* (NP-N)

rabbit Link ear

'the rabbit's ear'

(3) Swahili

a. *kiti changu* (N-Prn)

chair my

'my chair'

b. *kiti cha Hamisi* (N-NP(PP))

chair Prep Hamisi

'Hamisi's chair'

(4) French

a. *son livre* (Prn-N)

3.Poss.M book

'his/her book'

b. *le père de Jean* (N-NP(PP))

the father of Jean

'Jean's father'

(1)から(4)をまとめると次のようになる (Nが被修飾名詞)。

(5) N-NP(PP) NP(PP)-N

N-Prn Swahili (3), .. Tauya (1)

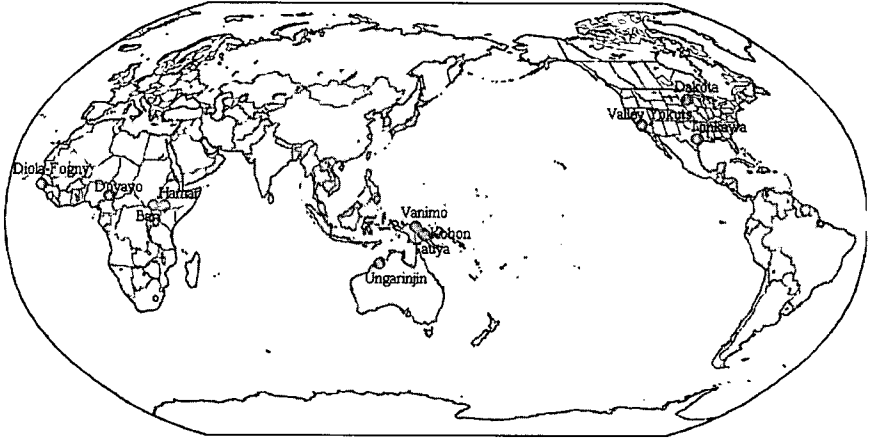
Prn-N French (4), .. Chinese (2), ..

表(5)右上のNP(PP)-N-Prnに該当する言語としてDryer (2005)はTauya語のみをあげている。またUltan (1978:36)は、一般化として「名詞の所有構造で属格-主要部名詞の語順であれば、(接辞でない)代名詞の所有構造でも同じ語順である」と述べている。

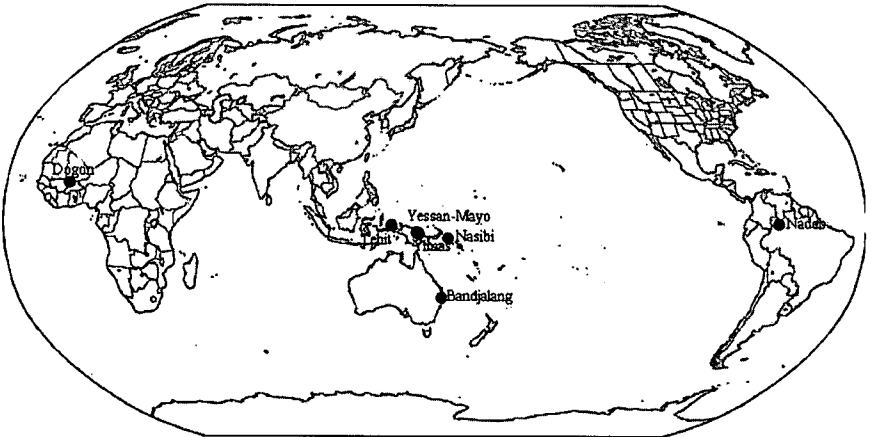
(6) A GN constituent order in a nominally possessed construction implies the same order in a pronominal (non-affixal) construction.

この一般化が正しいとすれば、Tauya語のような言語は存在しないことになる。しかし、Siewierska (2001:140)は、Genitive-NounかつNoun-Pronoun (Genitive)の言語としてTauyaを含む11言語を示し、またGenitive-NounかつNoun-Pronoun (Genitive)またはPronoun (Genitive)-Nounの言語として、7言語を示している²。これらの言語は、中央アフリカ・オセアニア・南北アメリカの限られた地域に集中している。

Genitive-Noun かつ Noun-Pronoun (Genitive) の 11 言語



Genitive-Noun かつ Noun-Pronoun (Genitive) または Pronoun (Genitive)-Noun の 7 言語



² Siewierska (2001: 140) の示す、Genitive-Noun かつ Noun-Pronoun (Genitive) の言語は、Bari (Nilotic, Nilo-Saharan), Dakota (Siouan), Diola Fogy (North Atlantic), Niger-Kordofanian), Doyayo (Adamawa, Niger-Congo), Hamar (Omoti, Afro-Asiatic), Kobon (Trans-New Guinea), Tauya (Trans-New Guinea), Tonkawa (Coahuiltecan), Ungarijn (Wororan, Australian), Vanimo (Sko), Valley Yokuts (Yokutsan) の 11 言語、

言語数と地理的分布の点からは、これらの言語を特殊なものと言えるかどうか不明である。しかし小論では、次節に述べるように、主要部が動詞と側置詞 (adposition) の場合に名詞句-主要部-代名詞という語順が存在しないことから、Tauya 語などが特殊な類であると考え、さらに「名詞句-主要部-代名詞 (NP-Head-Prn) という語順の言語は存在しない」という一般化の例外とならないことを述べる。

2.2 名詞句-主要部-代名詞という語順は存在するか

2.2.1 名詞句-動詞-代名詞という語順は存在しない

Tauya 語の属格表現における名詞句-被修飾名詞-代名詞という語順が興味深いのは、普遍的に存在しない語順を一般化して述べようとする際に例外となってしまうためである。Greenberg (1963: 91) は Universal No. 25 として「代名詞目的語が動詞に後続するならば、名詞句目的語も動詞に後続する」と述べている。

- (7) If the pronominal object follows the verb, so does the nominal object.

言い換えれば、「動詞に目的語代名詞が後続し、目的語名詞句が先行する (NP-V-Prn) (11) のような言語は存在しない」ということである。

- (8) English
- | | |
|----------------|---------|
| a. love her | (V-Prn) |
| b. love a girl | (V-NP) |

Genitive-Noun かつ Noun-Pronoun (Genitive) または Pronoun (Genitive)-Noun の言語は、Bandjalang (Pama-Nyungan), Dogon (Niger-Kordofanian), Nadeb (Makú), Nasibi [Nasioi (East Bougainville)], Tehit (West Papuan), Yessan Mayo (Sepik), Yimas (Sepik) の 7 言語である。Kobon については、Davies (1989) を参照。

(9) Japanese

- a. *kanojo-o aisuru* (Prn-V)
 she-Acc love
- b. *Hanako-o aisuru* (NP-V)
 Hanako-Acc love

(10) Swahili (Bantu/Romance)

- a. *nili-ki-tafuta* (Prn-V)
 I-Past-it-look
 'I looked for it.'
- b. *nilitafuta kisu* (V-NP)
 I-Past-look knife
 'I looked for a knife.'

(11) Non-existent (mirror-Bantu/Romance)

- a. # *love her* (V-Prn)
- b. # *a girl love* (NP-V)

これをまとめると次のようになる。

- | | | |
|------|-------|-----------------------------------|
| (12) | V-NP | NP-V |
| | V-Prn | English (8), .. - |
| | Prn-V | Swahili (10), .. Japanese (9), .. |

Greenberg の一般化(7)に対する反例は、Frans Plank らによる The Universals Archive (<http://typo.uni-konstanz.de/archive/intro/index.php>) には記載されていない(2008年10月8日)。表(12)の右上の欄に該当する言語は存在しないと考えられ、主要部が名詞の表(5)で右上の欄に該当する言語が Tauya

語などの少数だったことと平行している。

2.2.2 名詞句-側置詞-代名詞という語順は存在しない

さらに、主要部が側置詞 (adposition: P) の場合にも同様のことが言える。前置詞として代名詞と名詞句に先行する英語のような言語(13)、後置詞として代名詞と名詞句に後続する日本語のような言語(14)、さらには代名詞には後続するが名詞句には先行するドイツ語のような言語(15)は存在する。

(13) English

- a. at it (P-Prn)
- b. at home (P-NP)

(14) Japanese

- a. *sore-ni* (Prn-P)
it-to
- b. *gakko-ni* (NP-P)
school-to

(15) German

- a. *da-mit* (Prn-P)
it-with
- b. *mit Honig* (P-NP)
with honey

しかし、側置詞が代名詞に先行し、名詞句に後続する言語は存在しないと思われる。

- (16) a. # *at it* (P-Prn)
 b. # *home at* (NP-P)

すると側置詞の場合にもまた、名詞の(5)や動詞の(12)と平行する表を作ることができる。

- (17) P-NP NP-P
 P-Prn English (13), .. -
 Prn-P German (15), .. Japanese (14), ..

表にまとめた主要部が名詞の場合(5)、動詞の場合(12)、側置詞の場合(17)を見ると、「名詞句-主要部-代名詞(NP-Head-Prn)という語順の言語は存在しない」という一般化を述べることができそうであるが、主要部が名詞の表(5)における *Tauya* 語などだけがその例外となるように見える。表(5)、(12)、(17)をまとめれば次のようになる。

- (18) H-NP NP-H
 H-Prn English, .. (*Tauya*)
 Prn-H .., .., .. Japanese, ..

しかし以下では、*Tauya* 語の属格の接尾辞に、代名詞に付く *pi*(1a)と名詞句に付く *na*(1b)の2種類があることに着目し、実際には(1a)も(1b)も補部(complement)が主要部(head)に先行する語順であり、普遍的語順の例外でないことを述べる。(1a)では代名詞 *-pi* という音韻語(prosodic word)が主要部となり、*wate* を補部としてとるのに対し、(1b)では *na* と *e fanu* が結合した *e fanu-na* は主要部 *wate* の補部となっていることを以下の3点から論じる。第1に、属格の *na* は関係詞の *na* と同音である。第2に、属格名詞と同様に、1から4までの数詞は1語で、修飾する名詞に後続するが、5以上の数詞は *na* を主

要部とする関係節の形式で修飾する名詞に先行する。第3に、(1a)のような属格の代名詞が修飾する名詞に後続する語順より好まれないが、代名詞 *pi* が修飾する名詞に先行する場合もある。結論として、Tauya 語は「名詞句-主要部-代名詞 (NP-Head-Prn) という語順の言語は存在しない」という一般化の例外とならないことを述べる。

3. 属格の代名詞を主部とする根拠

3.1 属格標識と関係詞

pi で示される属格の代名詞を主部と考える第1の根拠は、属格の名詞句を示す *na* (19a) は関係詞の *na* (19b) と同音だという事実である。

(19) a. [_{NP} [_{GENP} [_{DP} ?e fanu-] na] wate] = (1b)

Dem man Gen house

'that man's house'

b. [_{NP} [_{CP} [_{IP} ya-ni ø ø -yau -e -] na] fanu]

1s Erg 3s see 1/2 Rel man

'the man I saw'

すなわち、*na* は主要部として名詞句 (DP) 及び節 (IP) を補部としてとり、より大きな句 (GenP あるいは CP) を作る³。これに対し、*pi* も主要部として働くが、単音節の代名詞とのみ結合するため、(音韻) 語 (Gen) のままであり、句を作らない。ここでは、主要部を枝分かれしない範疇 (non-branching category)、補部を枝分かれする範疇 (branching category) と定義する (cf. Dryer 1992)。結合した *ne-pi* が主要部 (D) として、修飾する名詞 *wate* を補部として

³ ここでは生成文法の範疇を用いる。DP は Determiner, IP は Inflection, CP は Complementizer をそれぞれ主要部とする句である。

とり、名詞句 (DP) を作ると考えられる。

- (20) [_{DP} *wate* [_D *ne - pi*]] = (1a)
 house 3s Gen
 ‘his/her house’

すなわち、全体の名詞句内の語順は、代名詞の(1a) (=20)も名詞句の(1b) (=19a)も補部-主要部だと考えられる。図式的に示せば、(21)のようになり、主要部は(21a)ではD、(21b)ではNである。

- (21) a. [_{DP} N D (Prn-*pi*)] = (1a)
 b. [_{NP} GenP (DP-*na*) N] = (1b)

この分析には、Tauya 語の指示代名詞-名詞という語順と合わないという反論が考えられる。指示代名詞を決定詞Dと考えれば、主要部-補部の語順(22)となり、(21a)と逆になるからである。

- (22) [_{DP} *me fanu*]
 Dem man
 ‘this man’

しかし、Tauya 語が属する Madang 語族の 13 言語 (Amele*, Anamuxra*, Bau, Bongu, Garus, Kalam*, Kobon*, Mugil, Nend*, Siroi*, Tauya*, Usan*, Waskia*) の中で指示代名詞と名詞の語順が WALS に記載されている 9 言語 (*) のうち、Tauya を除く 8 言語すべてが名詞-指示代名詞 (N-D) の語順である。よって、Tauya も名詞-指示代名詞の語順に相当する(21a)の構造を属格代名詞に対して持っていると考えられることは可能だと思われる。

3.2 数詞の語順との平行性

pi で示される属格の代名詞を主部と考える第 2 の根拠は、属格表現と同様の語順が、数詞の場合にも見られることである。Tauya 語では、1 から 4 までの数詞は (23a) のように 1 語で表され、修飾する名詞に後続するが、5 以上の数詞は (23b) のように *na* を主要部とする関係節の形式で修飾する名詞に先行する。

- (23) a. N *awi*
 two
 'two N'
- b. [*wesa?a awi (fofe) te- a- na*] N
 half 2 come get 3s Rel
 'seven N'

これは、属格表現が、代名詞 *-pi* では修飾する名詞に後続し、名詞句 *-na* では修飾する名詞に先行することと平行しており、代名詞 *-pi* は主部、名詞句 *-na* は補部となるというここでの分析を支持する。(23a)、(23b) の構造を示せば、(24a)、(24b) のようになり、(21a)、(21b) との平行性が見てとれる。(24a) の主要部は Num、(24b) の主要部は N であり、どちらも補部-主要部の語順と言える。

- (24) a. [_{NumP} N Num]
 b. [_{NP} Cl-*na* N]

また、数詞については Tauya 語も WALS で名詞-数詞の語順と記載されており、属する Madang 語族の 13 言語 (Amele*, Anamuxra*, Bau, Bongu, Garus, Kalam*, Kobon*, Mugil, Nend, Siroi*, Tauya*, Usan*, Waskia*) 中、記載されている 8 言語 (*) すべてが名詞-数詞の順である。

3.3 主要部決定のゆれ

第3に、代名詞 *-pi* が修飾する名詞に後続する (1a) や (25a) より好まれないが、(25b) のように代名詞 *-pi* が修飾する名詞に先行する場合もある。

- (25) a. *afe ten-pi* (N-Prn)
 mother 2p Gen
 'your mother'
- b. *ten-pi afe* (Prn-N)
 2p Gen mother
 'your mother'

これは、代名詞 *-pi* でなく修飾する名詞 *afe* を名詞句全体の主要部と考えることを示していると思われる。なぜなら、(25) では *afe* も *ten-pi* と同じく1語であり、統語的主要部は1語であって句でないという条件を満たしているからである⁴。すなわち(25a)、(25b)も(1a)、(1b)同様、語順は補部-主要部だということになる。

4. 結論と展望

以上、Tauya 語の属格名詞は、代名詞の場合は接尾辞 *pi* と結合して(音韻)語となり、主部として修飾する名詞に後続するが、名詞句の場合は関係詞 *na* を主部とする句を作り、修飾する名詞の補部となることを述べた。図示すれば、(26a)、(26b) のようになり、どちらも補部-主要部 (Complement-Head) の語順であるため、「名詞句-主要部-代名詞 (NP-Head-Prn) という語順の言語は存

⁴ この考えが正しいとすれば、修飾される名詞が、2語以上から成る、枝分かれする範疇である場合は、(25a) のような N-Prn のみが可能で、(25b) のような Prn-N は不可能だということになる。しかし、該当するデータが MacDonald (1990) には記載されておらず、現時点では調査ができていない。

在しない」という一般化の反例とはならない。

(26) a. [_{DP} [_N *wate*] [_D *ne - pi*]] (C-H)
 house 3s Gen
 ‘his/her house’

b. [_{NP} [_{GENP} *e fanu-na*] [_N *wate*]] (C-H)
 Dem man Gen house
 ‘that man’s house’

また、WALS では Tauya の基本語順が、属格-名詞、名詞-数詞、関係詞-名詞と示されているが、名詞-属格とする可能性も検討されるべきであり、普遍的語順の研究では注意深い観察と分析が必要なことをこの研究は示すものである。

今後の展望としては、上で提示した「名詞句-主要部-代名詞 (NP-Head-Prn)」という語順の言語は存在しない」という普遍性をさらに一般化して、「重-主要部-軽 (Heavy-Head-Light) という語順の言語は存在しない」という普遍性を述べる事が考えられる。「節-主要部-句 (CP-Head-XP) という語順の言語は存在しない」という一般化も成り立ちそうだからである。一例を挙げれば、句-名詞-節 (DP-N-CP) という名詞修飾構造の言語(27)はあっても、節-名詞-名詞句 (CP-N-DP) という名詞修飾構造をとる言語(28)は、WALS のデータによれば1言語のみ (Tigré) である⁵。

⁵ Raz (1983: 43) は、Palmer (1961: 25) を引きながら、通常、関係節は修飾する名詞に先行する、と述べ、さらに、書き言葉ではそうだが、話し言葉では名詞-関係節の語順が頻繁に起こる、と例文を示しながら論じている。とすると、節-名詞-名詞句 (CP-N-DP) という語順のみの名詞修飾構造をとる言語は存在しないことになる。

- (27) Swedish (DP-N-CP)
- a. *en flickas hatt* (DP-N)
 'a girl's hat'
- b. *en vän, som bor i Stockholm* (N-CP)
 a friend who lives in Stockholm
 'a friend who lives in Stockholm'
- (28) Non-existent? (CP-N-DP) [Cf. Tigré]
- a. # *hat of a girl* (N-DP(PP))
- b. # [*who lives in London*] *friend* (CP-N)

同様に、節-動詞-句 (CP-V-XP) と節-側置詞-句 (CP-P-XP) という語順の言語も存在しないようである。これらの観察が正しければ、「節-主要部-句 (CP-Head-XP) という語順の言語は存在しない」という一般化が成り立ち、本研究で述べた「名詞句-主要部-代名詞 (NP-Head-Prn) という語順の言語は存在しない」という一般化と合わせることで、「重-主要部-軽 (Heavy-Head-Light) という語順の言語は存在しない」という普遍性があると言えそうである。しかし、この統一的一般化の可能性については、例外となる言語のデータを再検討する必要があるため、機会を改めて論じることにはしたい。

参考文献

- Davies, John. 1989. *Kobon*. London: Routledge.
- Dryer, Matthew. 1992. The greenbergian word order correlations. *Language* 68, 81-138.
- Dryer, Matthew. 2005. Order of genitive and noun. In Haspelmath et al. (eds.), 350-351.
- Greenberg, Joseph. 1963. Some universals of grammar with particular

- reference to the order of meaningful elements. In Joseph Greenberg (ed.), *Universals of grammar*. Cambridge, Mass.: MIT Press, 73-113.
- Haspelmath, Martin, Matthew S. Dryer, David Gil, and Bernard Comrie (eds.) 2005. *The world atlas of language structures*. Oxford: Oxford University Press. [Online version, <http://wals.info/index>, accessed on Oct 8, 2008]
- Li, Charles N. and Sandra A Thompson. 1981. *Mandarin Chinese: A functional reference grammar*. Berkeley: University of California Press.
- MacDonald, Lorna. 1990. *A grammar of Tauya*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Palmer, F. R. 1961. Relative clause in Tigré. *Word* 17, 23-33.
- Raz, Schlomo. 1983. *Tigré grammar and texts*. Malibu: Undena Publications.
- Siewierska, Anna. 2001. Order correlations between free and bound possessors: Perspectives from diachronic change. In Walter Bisang (ed.) *Aspects of typology and universals (Studia typologica 1)*. Berlin: Akademie Verlag, 133-152.
- Ultan, Russell. 1978. Toward a typology of substantival possession. In Greenberg (ed.) *Universals of human language, Vol. 4: Syntax*. Stanford: Stanford University Press, 11-50.